

---

○議長（藤井 要君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後 3時05分）

---

◇ 鈴木 茂 孝 君

○議長（藤井 要君） 一般質問を続けます。

通告順位5番、鈴木茂孝君。

（2番 鈴木茂孝君 登壇）

○2番（鈴木茂孝君） 2番鈴木です、宜しく申し上げます。午前中の田中議員に対する町長の答弁の中で、副町長の条件の1つに町長を諫めることのできる方とありました。私は、副町長だけでなく、議員もその役割を担っていると考えております。厳しい指摘もすることがありますが、議員も行政も一致団結して、より良い松崎町になるよう議論していきたいと考えています。それでは一般質問を始めます。

今回は、道の駅三聖苑直売所等の計画についてと、鳥獣害及び耕作放棄地への対策についての2点について伺います。大きな1つ目、道の駅三聖苑の直売所等の計画について。道の駅は建設省の指導によって、1993年に制度化されました。現在、全国に1160あります。道の駅三聖苑は、1995年制度開始から2年の、まだ全国に200程しか無い早い時期に登録されました。当初は地域のコミュニティの場として構想されたものと思います。しかし今の道の駅は、多くの観光客を呼び込む地域の特色をPRする場となり、その場所自体が観光の目的地となるような、多様な施設を持つものもあります。その中で多くの道の駅が、地元の農産物を販売する直売所を併設しております。

そこで1番としまして、松崎町の現状を見てみますと、今、町内には2つの直売所があります。全国の1160の道の駅、そして町内にも直売所がある中、三聖苑の直売所に来ていただくには、他には無い魅力が必要と思いますが、この魅力はどのようなものと考えていますか。

2つ目、今回のワーキンググループは、生産者や実際に消費者として道の駅を利用している人など、より現実的な意見を持つ方を中心に構成されております。ワーキンググループ内でより現実的な話をしていく中で、建物の位置を変更してはという意見も出ています。以前の計画のどこまでが変更可能と考えているのでしょうか。

3つ目、この道の駅の整備計画は、赤字体質からの脱却、地域の振興、交流人口の増加等を

目的にしており、これからの松崎町の将来を左右する大きなプロジェクトと捉えております。しかし、想定している収支において利用者の数、客単価、レストラン、天城山房の利用率の設定が現実的ではない点もあるように思えますが、この数字の根拠について伺います。

大きな2つ目として、農作物への鳥獣害、耕作放棄地についてお聞きします。私は岩科地区に住んでいますが、今年は多くの田んぼにテープが貼られているのを目にします。田植えした苗を鹿が食べるという被害が出ており、このテープは鹿よけだそうです。調べてみますと、他の地域でも田植えの直前に苗を食べられて、今年の田植えを諦めたという農家もあるようです。農家にとっては死活問題で、生活していけずに農家を辞めることとなります。また、鳥獣害によって農家だけではなく、自家用農作物を作っている方も生産意欲を無くしてしまいます。そこで1番、農作物の鳥獣害被害について、現状の把握はできているかをお聞きします。また、その2、耕作放棄地が動物のえさ場や隠れ場所になっている事例がみられます。耕作放棄地の対策についてどのように考えているかお尋ねします。以上、壇上よりの一般質問を終わります。

(町長 長嶋精一君 登壇)

○町長(長嶋精一君) 鈴木議員からの質問にお答えします。まず、大きな1つ目、道の駅三聖苑直売所計画について。その内の1つ、全国には道の駅に直売所が併設されているところが多数見受けられる。今回、道の駅三聖苑に建設予定の直売所は他と違うどのような魅力があると考えているかという質問でございます。回答します。

道の駅は、道路利用者への安全で快適な道路交通環境の提供と地域の振興に寄与することを目的に、平成5年の登録から現在までに全国で1,145駅が登録されております。道の駅の機能は、休憩機能・情報機能・交流機能を果たすこととされておりますが、私はこれらに防災機能を加えた上で、住民と観光客が楽しく、安心して集うことのできる一大交流ゾーンにしていきたいと考えております。また、道の駅で「地場の産品が買える」、「地場の料理が食べられる」といったお客様のニーズに応えられる道の駅でありたいと思っております。そのために、直売所につきましては、農林水産物だけではなく、加工品、松崎ブランド、町民の方の工芸品や姉妹都市の産品など松崎町のあらゆる地場産品が集まる場所にしてまいりたいと考えております。現在、ワーキンググループで、整備計画のハード面に加え、道の駅の魅力づくり、誘客対策などソフト面についてもご意見をいただいておりますので、反映できるものは取り入れ、整備運営に生かしてまいりたいと考えております。

同じく、道の駅の2つ目の再度、ワーキンググループを作り再検討しているが、前の計画のどこまでの変更が可能と考えているかという質問であります。渡辺議員のご質問にもお答えしましたが、町民の皆さんが関わり策定した道の駅パーク構想基本計画を基本として、ワーキンググループは道の駅の整備運営にかかる意見集約の場と考えており、ワーキンググループで提案されたご意見で反映できるものは取り入れ、整備運営に生かしてまいりたいと考えております。

道の駅の件で3つ目でございます。想定している収支において、利用者の数、客単価、レストラン、天城山房の利用率の設定は現実的ではないと考えるが、この数字の根拠はどうかというご質問でございます。回答いたします。先月の道の駅整備運営ワーキンググループにおいて、現在までの道の駅花の三聖苑の想定収支案についてご説明をいたしました。整備後の道の駅については、天城山房の飲食と直売所での販売が収入となり、全体の事業収益を算定するにあたり、年間の道の駅利用者を9万7千人、8万5千人、8万人と3段階で見込み、試算いたしました。これは、町内や近隣の直売所の利用実績を勘案したもので、この他に町内や近隣のスーパー利用者などの消費行動変化も見込まれるものであります。消費単価については、町内の直売所の単価を参考にしております。現在、道の駅花の三聖苑の収支計画の精査をしており、天城山房の利用者数や経常費用の見直しを行っておりますので、今後ワーキンググループや議員の皆さまに提示してまいりたいと考えております。

大きな2つ目の質問でございます。農作物の鳥獣被害、耕作放棄地についてでございます。その内の1つ、農作物への鳥獣被害について現状の把握はできているのかどうかという質問にお答えします。野生鳥獣による農作物への被害状況調査については、毎年、国からの依頼を受けて、各地区の農業委員や農政委員に協力をお願いして、鳥獣の種類や被害面積、被害金額等の調査を実施しています。平成30年度中の被害結果については、スズメやカラスなどの鳥類や、イノシシ、シカ等による被害面積で117アール、被害金額で1,649千円となりました。この調査の目的は、農作物の被害状況を的確に把握し、効率的な被害防止対策の実施に必要な資料とするところありますが、自家消費用に作物を栽培している農業者は、調査対象外となります。また県に確認したところ、調査対象者は市場などに出荷している者とし、直売所に出しているだけの農業者については該当しないとの指導があったため、平成30年度調査では被害には含まれていません。しかし、実際には、自家消費分や直売所に出す農作物も、農業者にとっては大事な農作物の被害となりますので、今後の調査においては自家消費分や直売所、市場などの

販売先等の区分も加えて、正確に把握していきたいと考えております。

同じく農作物の関係の2でございます。耕作放棄地が動物のえさ場や隠れ家になっている、耕作放棄地の対策に向けてどのように考えているのかという質問でございます。回答いたします。耕作放棄地の解消に向けては、中間管理機構による新規就農者等とのマッチングや、基盤整備事業による農地の集約化、効率的な農業の推進など取り組んでいますが、実際には担い手がなく、マッチングなど進んでいない状況であります。こうした中、雑草が生い茂っている耕作放棄地については、農業委員会から草刈り等の保全管理をお願いする文書等を送付しています。また、今まで臨時職員1名で行っていた農地の利用状況調査について、今年度より4名の農地利用最適化推進委員の方々にも加わっていただき、現場活動の研修をはじめ、農地利用の集積・集約や耕作放棄地の発生防止などに対する体制強化を図っています。また、耕作している農地における鳥獣被害対策については、平成30年度から、防護柵や電気柵設置等に対する被害防止対策事業補助金の限度額を10万円から15万円に増額し、先月には農地だけでなく身近な鳥獣被害対策に係るチラシを作成して全戸配布し、草刈りなど日常の管理や不要な食物・果樹等の放置や投棄にかかる注意喚起を行ったところです。今後は、鳥獣被害対策に係る講演会なども予定しており、広く住民の方々に周知していくとともに、個々だけでなく地域などの団体での対策も検討していきたいと考えております。以上で鈴木議員の質問にお答えいたしました。

○2番（鈴木茂孝君） 一問一答でお願いいたします。

○議長（藤井 要君） はい、許可します。

○2番（鈴木茂孝君） 道の駅ですね、帯広や長泉町、先ほどから言われているようにいろいろなところから作物を集めてきますよってことなんです、やはり、松崎町の農産物が何よりメインでないといけないと思っています。ですので、その辺の例えば、農業者を育成する・先ほど言われました鳥獣害の整備をきちんとするというようなことと併せてやるということも必要だと思います。

それから、ただ帯広の物、長泉の物がありますよではお客様は来ないというふうに思っています。何か目玉になるような物を作っていく、それには加工部会のようなもの、商品開発部会のようなものを設定してやらなければいけないと思っていますが、それについてはいかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 鈴木議員の初めのご質問ですが、やはり直売所っていうのは

単なる物を売る場ではないという形で、直売所・・当然農産物を集めるということはありませんので、町全体の農業振興というような形でやはり考えなくてはならないということは、我々もそう感じております。生産意欲をいかに高めるか、そのためには今言ったように有害鳥獣、あるいは耕作放棄地対策へと繋がるという、まさにこれに繋げていかなければならないということで、思っておりますので、そういった農業者の・・全体の町の農業振興という形での直売所の1つあり方があるのかなという形で思っています。

それから、加工部会という話がありました。先ほど、私、質問で答えましたが、やはり直売所というのは6次産業化、そこで生産、加工、販売という1つのところができるわけですので、直売所は6次産業化の入り口ということ申し上げましたけれども、そういった形で、それは管理運営者がやるのか、あるいは地元のそういった団体がやるのか含めましてですね、そういった加工の開発というか、そういったものが非常に大事ななというようなことで思っていますので、是非、住民も巻き込んでやって行きたいなというふうに思っています。

- 2番（鈴木茂孝君） 是非ですね、加工につきましてはいろいろな方が参加できますように、農家が農作物を持ち込んで、そこで加工して直売所に出せるというような形がとれるように、是非そのように柔軟に対応していただきたいなというふうに思っております。

この9月の町報ですか、町報で「町長室からこんにちは」で、町長はこのように書いておりました。道の駅に直売所を設置することは、全町民の食を守る最後の砦ということを書いてありましたけれど、これについて詳しく説明していただけますか。

- 町長（長嶋精一君） 鈴木議員は町を見て、どんどんどん個人事業所が少なくてって、ってというのは感じておると思います。食べ物屋が無くなった、喫茶店も無くなった、中華料理屋も無くなった、診療所も1つ無くなった。それを見てどう思いますか。私は危機感を感じるんですね。どこの自治体も頑張っている自治体というのは、総じて民間が頑張っているんです。民間が頑張っているから、非常にその自治体に活気がでるわけです。それに行政は呼応してやっているんですね。言ってみれば乗っかっているというか、民間が頑張っているわけです。

ところが松崎町のようにですね、民間が相当、今言ったように事業所が無くなっていると疲弊している訳です。そしたら、我々行政が出るしかないじゃないですか。我々が引っ張って行くしかないじゃないですか。私はそれを言っているんです。それでね、どんどん

どんお店が無くなった。最後の砦が、町がやっている直売所がですね、景気が悪くなったと店を辞めますというわけにはいかないんです。町でやるからには、1人が転職しても次の人が来ます。だから継承していけるわけですね。ところが個人の場合は、後継者がいないと辞めてしまうということがあります。それは、よく分かると思います。従って私は、最終的な食の砦になると。そして天城山房は、直売所の材料を使って料理を提供する。大地震とかそういう災害があった場合は、天城山房の所で作ったものを各住民に届けることができるという意味で、そういうことを考えて言っております。以上です。

○2番（鈴木茂孝君） 松崎町でも民間で、寄り道売店というお店がやっています。彼らは自分たちで資金を調達して、建屋を建て光熱費を賄い、そして直売所の利用してくれる農作物のお金を支払いしているという形です。民間の方が頑張っているよというのであれば、例えば道の駅の収支ですね・手数料を8パーセント、10パーセントではなくて、せめてその直売所の方たちと同率にして、お互いで公平に勝負をしましょうという形にしたらどうですか。

○町長（長嶋精一君） 寄り道売店の経営者の方は、私は尊敬をしております。従って、そこで私は、そこで競争しようという言葉は今、鈴木議員は言いましたけれど、競争しようなどと全く思っておりません。それは、寄り道売店の経営者も同じだと思います。クラウドイングアウトという言葉がございます。それは公的なものが民間を圧迫するという意味です。クラウドイングアウト・それは例えて言うのですね、国の金融機関が、長期貸し出しの低いレートで・固定貸しでどんどんどんどん融資をすると、民間の市中銀行はまいってしまいます。そういうことを簡単に言うとクラウドイングアウトです。景気の悪いときに全員が公務員になったとしたら民間企業に行かない、これもクラウドイングアウトです。たくさんの金融機関がありまして、国がそんなことをやると、中小の民間企業は大変になります。そうすると、あまりにも影響が大きすぎるわけです。

ところが、うちの町の直売所、寄り道売店、それから農協さんがやっている売店、農協さんは法人組織ですけれども、個人でやっている寄り道売店も経営能力のある方がおりますのでそれは、お互いに助け合いながら、ウチの方の直売所にはこれが無いよと・お客さんが例えば、キャベツが無いよと来たとき、寄り道売店さんで売っていますよというような補填し合う仲になっていきたいと私は思います。これは、寄り道売店の経営者の方がはっきり申し上げました。だから、私はこれを推進していきたいと。8パーセントとか10パーセントと

か、まだ決まっていますけれどもね。それについては決まっていますけれども、そんなに高い料率でやったりしたならば・・・、いや、寄り道売店さんと競争するってわけではないですよ。20パーセントとか全く考えていません。だから、それについては今後、皆さんと協議しながらね・・・、皆さんというか協議をしながら考えていきたいというふうに思っています。決して民間圧迫ではございません。

- 2番（鈴木茂孝君） 私も寄り道売店と競争するって話は申し上げてないと思いますけれども、なるべくそういう不公平がないようにしていただきたいということでございます。

それでは2つ目ですね、ワーキンググループのことですけれど、ワーキンググループは実際に生産者であったり、消費者として道の駅に出入りしている方、本当にお客さんのニーズをつかんでいる方がメンバーになっております。その中で、実際に運営するのにこれではまずいよというような提案をしております。それが、なかなかその・・・位置を動かさないととか、予算が無いとか、反映するものは反映して取り入れて行くような話ですけれど、じゃあ、何を基準に取り入れたり、これはダメだよというような形にするのか教えていただきたい。

- 町長（長嶋精一君） まず、第1に安全第一であります。効率第2・・・、安全第一であります。鈴木議員から2つほど大きな提案を受けておまして、それについては、しっかりと受け止めて変更しているではありませんか。あそこのバックヤードが狭すぎると、そこで車が入ったら轢かれる人がいると困るじゃないかというというような意見は早速取り入れて、安全第一でやっております。それだけのご理解下さい。その他は、ワーキンググループはね、やっぱり僕らはですね、無尽蔵なお金があつて、さあやろうというプロジェクトは大体僕の経験だと失敗してます。ある程度の限られた資金でもって、皆がどうやってやるんだっていうことを考え、考え、考え抜いてやったプロジェクトでなければ成功しないと思います。だから私どもは、限られた資金でございしますが、それを有効的にワーキンググループの方たちと協議をしながらやっております。できることはやっております。安全第一であります。以上です。

- 企画観光課長（高橋良延君） 変更をどこまでできるかというようなご質問がありましたけれど、我々、申し上げております。町として変更できる・・・そういった提案として受け入れて、これは良いなと思ったことは、それは受け入れてやりますというような形でワーキンググループの当初、冒頭では申し上げたつもりでございします。ですから色々なご意見を精査し

て、それで町としてこういうふうに判断するというような形は、ワーキンググループにさらにフィードバックして戻していきたいというようなことは作業としてやります。

それから、位置の関係云々ということでありませうけれど、位置の関係についても、やはり29年からと申し上げましたけれど、そういった中で、全く白紙のところには建物を建てるとかそういったことではなくて、今の既存の天城山房とかを活かしたなかで、あのエリアのなかでどうするかと考えたときに、天城山房と隣接した中でやった方が、より効果があるなという中で、いろいろな・・・これはアドバイザーの大学の先生とかと組んでいました。県の方もいましたし、あるいは住民の方の委員会、そういったことで話し合ってますね、そういった今の整備の計画のところになったところでございますので、それは十分ご理解下さい。宜しくお願いします。

- 2番（鈴木茂孝君） その辺の理解はするんですが、ただやはりダメなものはダメと言うわけではないんですけど、難しいことは難しいです。例えばレストランの窓と直売所の壁が重なっている、レストランからごはんを食べるときに直売所の壁を見ながら食べるようになるということですか、やはり出入り口を広げるけれども出荷者の出荷するときの道が狭いというような問題もございます。それは安全にとって、非常に難しいというか、安全が第一と言うわりには、もっともっと安全にやってもらいたい。そういうふうに思います。

そして先ほど、一度白紙に戻してやったらどうですかという話がありましたけれども、私は白紙に戻す必要はないとそのように思っています。ですので、今の基本計画をたたき台にして、そして計画を動かすと。まだ、着工したわけではないので図面でいくだけでも動かせるという段階にあると思います。そして、今のワーキンググループのメンバーは、本当にやる気で自分でやるつもりで考えています。自分がやるならこうしたいという思いが強いです。もし、そのような思いがなければ、町の提案をそのまま受けて、そのまま何も言わずにやれば終わることですけど、そうではなくてこうしたい、そういう意志が強い。是非ワーキンググループに任せていただいて、一緒に町とより良い道の駅を作っていきたいそのように考えております。どうですか。

- 企画観光課長（高橋良延君） まったく我々も、ワーキンググループの意見を何も聞きませんというスタンスではありませんということを本当に申し上げます。それは当然、一緒にやって道の駅をより良くしていこうという方向性はあるわけですから、そのところで良いご意見、提案がございましたら、それは町として受け入れて行きます。

それから、先ほどのバックヤードの通路の安全性という中では、その通路を広くして、今回、鈴木議員の提案も受け入れて、そういった中でのことも意見に反映していこうかなというようなことでは1つ思っていますので、これは、また今後のワーキンググループで示しますが、そういったことで、やはりできるものは我々は受け入れますというような形で見えています。ただ、そこが全てですね、ワーキンググループの考えが全部受け入れて下さいという中では、やはり我々も、そこは町としても判断はさせていただきたいなというふうに思っています。

○町長（長嶋精一君） ワーキンググループに全部任せて下さいという言葉は、ちょっと私の方には理解できないなと。逆に行政にみんな任せてくださいと言ったらどう思うのかというふうに思います。中でね、現実可能で良いものは取り入れますと言ってるんですね。だから、それはお互いに考えながらやってもらいたいなと思います。

天城山房から食事をしていて、直売所のところが少し見えるわけですね。それはさっき言いましたね、だから位置を変更しろと。位置は若干変更しています。それは鈴木議員の提案のあった件に応じて、うーんと移動するわけじゃないけれども最低限移動しました。だから何も聞いていないというわけじゃないです。そして、ハードがだめならソフトという面がございます。食事をしていて全てが建物で遮られているわけじゃないですね、遮られているわけじゃないです。そこで私はね、人間の知恵をして、オー・ヘンリーという作家の「最後の一片」という作品がございます。私はね、建物を・・・ガラス越しを遮るのであれば、そこにこの地の・・・例えば夏だったらこういう木々、こういう花、四季の花をですね、そこら全部をやるわけじゃなくて、そこらに掲示すれば、お客様もそんなに違和感を感じないのではないかと私は思うわけです。そういうことで、あまりにもそのワーキンググループの・・・簡単に言うと、オラの意見を取り入れなきゃどうしようもないぜというような、そういう考えは始めからちょっと取り除いていただいて、一緒にやっていこうよということになっていただけないでしょうか。

○2番（鈴木茂孝君） なかなかこの話は平行線でアレですけど、私ももちろんワーキンググループの方も、皆さん一緒にやっていきたいとこのように思っています。

そして最後にですね、先日、ワーキンググループで南伊豆の湯の花売店を立ち上げた吉田さんの話を伺いました。その中で、しっかり整備すれば、この道の駅は伊豆で1番の道の駅になる可能性もあるとおっしゃっていただきました。しかし同時に、ワーキンググループの

意見をしっかりと取り入れて、一緒になってやっていきなさいとそういう忠告もいただいております。それは町長も一緒に聞いていると思いますので、そこをしっかりと考えていただいて、これから一緒にやっていただきたいと思います。

3点目です。現状では三聖苑の利用客は天城山房2万人、そして、かじかの湯が2万2千人、合計4万2千人です。温泉に入って、そして天城山房でごはんを食べるという方もいらっしゃいますので、実際よりもこれは多いんじゃないかと思われまます。今後は依田邸で、温泉は少し離れた位置になりますので、両方の相乗効果というのは以前よりは薄れてしまうのかなというふうには思っております。そして、西伊豆町にも新たな直売所ができる予定です。もちろん、町内にもまだ2つあります。直売所で9万7千人の利用客を想定していますが、西伊豆町が予定している大きな国道に面している直売所ですが、8万人という人数を想定しております。それよりも1万7千人多いということです。それから、客単価におきましても、農協の売店は客単価750円であります。今回の道の駅は、客単価が千円ということであらうたっております。寄り道売店は千円ですけれど、いまの形態ですと農協の750円に近い数字になるのではないかと思います。9万7千人の利用者の想定ですと2,425万円の差額となりまして収支はマイナスとなってしまいます。また、天城山房のレストランについては、9万7千人のうちの40パーセントがそこで食事をするという想定になっております。直売所を利用した10人中4名がそこで食事をするということです、このデータについて改めてどう考えますか。

○企画観光課長（高橋良延君） 想定収支につきましては現在のところ3パターン、9万7千人と8万5千人、8万人ということの3パターンで一応見込みを・・それぞれの試算を現在しております。これはまた、できましたらワーキンググループ、議会の方に示したいと思っております。8万5千人というのは寄り道売店さんの年間に利用者の数ということです。8万人というのがJAのほのぼの売店の利用実績という中で、この3パターンで現在のところ収支を立てているところでございます。

それから1,000円の単価ということで申し上げましたけれども、これは当然、農産物の単価、農産物の販売だけではなくて、いわゆる松崎ブランドとか松崎のお土産品とかを含めて、そういった中で直売所というのは、今後、運営していくというようなことでございますので、そこはJAのほのぼの売店さんの単価とは若干違うのかなというようなことで考えております。寄り道売店さんは1,000円でございます。そういったところも参考にしながら、

ここは単価は1,000円という形で示させていただいたところでございます。

あと、当然、全体の収支ですね、今の8万人までの見込みの中で、どう収支、支出を想定してやっていくかという中では、最終的に利益のところを見るならば、費用という精査をするのが非常にまた重要であると思います。そういった中で三聖苑については、抜本的に人件費ですね・・・やはりお店をやっていく中では人件費のところ非常に大きいところです。人件費のところを抜本的に見直しをいたしまして、振興公社の職員のやりくり、そういったことを含めて人件費の精査をしていますので、最終的にその収支をですね、皆様方に示していきたいなと思います。

○2番（鈴木茂孝君） 先ほど質問しました、直売所を利用した10人中4人が食事をするという件についてお答えしていただければ・・・。

○企画観光課長（高橋良延君） 天城山房の食事の利用率、これも当初、我々は全体の利用者の4割ですか・・・という形のことを想定しましたがけれども、これも抜本的に見直しをいたします。そういった見込みの仕方は致しません。実際のところ、今現在、天城山房に2万人ですね・・・2万人から2万1千人ですか。こちらの利用の今の実績を元に算定をしてみたいというようなことで思っておりますのでね、単純に40パーセントで3万なんぼとかそういったことの見込みはいたしません。

○2番（鈴木茂孝君） 今の話を聞いていますと、収支をこれから出すというような形と捉えて宜しいですか。

○企画観光課長（高橋良延君） 今現在、私どもの方では試算はしておりますので、今度、ワーキンググループですとか、議会等々の全協の中では説明してみたいと思っています。

○2番（鈴木茂孝君） 収支はプラスということですか。

○企画観光課長（高橋良延君） 8万人でも収支が均衡になるような形で、若干のプラスですがけれども、そういった形の試算であります。

○町長（長嶋精一君） 南伊豆のね、湯の花の吉田謹治さんがアドバイザーとして・・・、さっき鈴木議員もおっしゃいましたけれども、南伊豆の湯の花を開設するときに、これほど売上げが伸びる直売所になるとは思わなかったと、正直に申しました。年間3億の売上げをした元経営者であります。そういうふうにはですね、将来の予測というのは極めて難しいですね。いろんな条件を重ね合わせてやったとしても、それが正しいかどうかは分からないんですね。

それで私はですね、道の駅直売所について、3つのこれだけは我々がやって行くんだと、これを願望にするんだといったことは、やはりですね、いかに直売所に魅力ある商品製品を集めるかです。いかに良い物を集めるか、それは松崎の地場産品でなければまずい・・・基本はそうです。しかし、他所でやっていない帯広とか、そういったところの提携しているところを集めてみるということは、他ではない、私は松崎町の道の駅の売りになると思います。

2つ目はですね、資金調達です。1億5千万のこれからの総費用をね、国と県がいくら補助してくれて、町の持ち出しがいくらになるのかと・・・ここは、もう最重要であります、資金面で。いくら計画どおりいったとしてもですね、物事というのは計画どおり行きません。なぜならば、世間一般では倒産する会社があります。それは全て、当初は計画通りにやるつもりでいたんでしょ、しかし現実問題倒産するわけです。どんなことが起きようとも、私どもは財務的に大丈夫だということを掴んでおります。そして先ほど、企画の課長が申し上げました、どんな経済状況になろうとも人事面で、振興公社の欠点といわれるところをがらりと長所に変えて、民間企業に委託するよりも、振興公社に委託して良かったなというような形にいたします。8千万でも利益がいくという形になっておりますが、決して最終的な利益を作るために無理矢理、工作した数字ではございません。極めて現実的な数字であります。以上です。

○2番（鈴木茂孝君） 私もちらに移住しまして、農業を始めまして、経営的にはかなり厳しく見ているつもりでおります。やはり、そのような楽観的な形ではなくて、どこに落とし穴があるか分からない、そのような形でやって行かないと難しいと思います。今、必ず、黒字にしますよという力強い言葉をいただいたので、是非そのようになればいいなというふうに思いますし、私もそのようになるように力を尽くしたいと思っております。ただですね、松崎町の財政は厳しいです。限りある予算で、しっかり結果を出して欲しい。そのためには利用者数の設定、それから今の観光の環境や、地域資源を十分に分析して、今後将来に渡って、ビジネスとして成り立つか、そういう視点が必要となってきます。私も、ここが多いんじゃないかとか、少ないんじゃないかと、これは過剰じゃないかと、そういうことが言いたいのではなくて、適正な数を見て、それに合った施策をとりましょうよというようなお話です。ですから多すぎではダメですよって話ではないです。ただ、少し過剰である、そして、もし、それであれば直売所の施設を少し小さくしても、もっと利益のあるものにする。

もしくは、直売所の規模は同じでも、もう少し利益のある物は何だろう。加工品をもう少し作った方が良くないかとか、どっかのお店に入ってもらった方が良くないかとか、そのようなことを考えて行くってことも必要じゃないかというふうに思っております。

これから、しっかりとワーキンググループの方々と同様というか、私たちワーキンググループから見れば、やはり敷かれたレールをどんどんどん走らされているというような気持ちが強いです。それは、行政の方にとっては、そんなことないよと思うかもしれませんが、実際に私、ワーキンググループの方々とお話を1対1でしています。その中で、やはりそういう気持ちを持つ方が非常に多いです。そのことにちょっと気をつけてもらって、なるべく歩幅を合わせてもらうということでやっていただきたいというふうに思っております。次にまいります、5分延長を・・・。

○議長（藤井 要君） 5分延長を認めます。

○2番（鈴木茂孝君） 農作物の鳥獣被害についてですけれども、現状の把握というのは、私も賀茂農林事務所に聞きましたが、過去5年間でかなりぶれております。ある年は1,700万円ある年は300万円ということで、とてもデータとしては使えないというようなデータが出ております。そのことはご承知ですか。

○産業建設課長（糸川成人君） 今、ご指摘のありました過去のデータの比較ですけれども、そちらの方も賀茂農林の方も集計をとっていただいて、賀茂地区の全体の集計というの、一覧表としていただいております。その中で松崎町のデータを見ますと、増減がかなりあるということですね、その辺の現状の把握とか・・・なかなか聞き取りで行ったりとか、被害面積の算定の仕方といいますか、個人の聞き取りをした方の印象といいますか、そういうところもあるものですから、多少、波があるのかなということですが、なるべく今後はそういうところを少なくして、情報をなるべく多くとって、町全体の被害額がわかるような形の調査方法をとっていただければと考えています。

○2番（鈴木茂孝君） 調査も必要なんですけれど、なかなか、そういうのって難しく、人によっていわれたように違うということもあって、なかなか、同じような状態で取るというのは非常に難しいと思います。ですが、私たちの農業者としての肌でいうと、確実に迫ってきています。岩科でも鹿のテープが多いというお話をしましたが、私もつい先日、自分の・・・人家の前ですけれど被害がありました。そのように、確実に被害が来ています。ですので、基盤整備をどうのってとか、何とかが言っている間にもう、どんどんどん、町

単独でもいいんで、どんどんどん対策をとっていただきたい。

例えばですね、西伊豆ですけれども、西伊豆にはですね獣害対策実施隊というのがありますが。猟友会にお願いしています。それは、町からのお願いだけではなく、住民からの通報によっても出動して、それに対して報酬を町から支払うという形になっております。そうなりますと、例えば被害があるかも知れないということで猟友会の方が行って、例えば空振りというか、獲物がなかったとしてもその方たちには出勤・・出たよということで報酬がもらえるそうです。そのように、猟友会の方々に、少しでも長くやっていただくというようなことも考えていかなければいけないと思います。この制度は住民にも好評で、予算額もオーバーして、来年からもう少し増額しようということらしいですけれども、松崎町でもどうですか、対応してはみませんか。

- 産業建設課長（糸川成人君） 鳥獣被害対策実施隊というのは、松崎町の方にも実際あります。ただ、内容的には西伊豆と異なりまして、松崎町の実施隊につきましては、職員が・・産業建設課の職員が、産業系のほうの職員が実施隊としてメンバー登録されています。

作業の内容としまして、猟友会がイノシシ、シカとか大型獣を対応するのをお願いしております。実施隊につきましては、今までハクビシンとか、そういった小型の獣ですね・・小型の獣に対しての被害対策っていうのは、今までボランティアでお願いしていたようなところがあるものですから、そういうものに対しては実施隊で対応していこうというような棲み分けをして、実施をしているところでございます。

- 統括課長（高木和彦君） 被害の関係でありますけれど、今年9月でしたか8月ごろでしたか、被害の状況を調べて、被害のマップを作ろうと準備をしています。

もう一つはですね、鳥獣害につきましては、今までは各農家に、自分のところは自分で守ってほしいというスタンスがありましたけれど、そこをもう少し考えてですね、地区全体を囲うですとか、例えば、田んぼの10メートル四方で、4つやっちゃうと12部屋あって・・、全体をやれば3分の2の長さで済むということもあるようですから・・それと伏倉ですとか桜田ですとか、あと南郷の方に耕作放棄地があって、そこも町の方は、所有者にそこを刈ってください、そうしないとその中に住み着くことがありますと通知はしているんですけども、もう相続なんかはわからなくなっていて、送ってもやっていただけないことがあるものですから、その辺については町の方でも、シルバーさんにやっていただくのかわからないですけれど、座ったまま草が刈れるような便利な機械がありますので、そういうのを活用して

ですね、地区に入らないような対策を取ろうかということ、今、内部で検討しているところでございます。

○2番（鈴木茂孝君） 私、提案なんですけれど、例えば刈ってくださいねといちいち言うのは気が重いじゃないですか。例えば年間契約みたいな形で、農業者でもシルバーさんでもいいんですけど、そういう方たちに新たな仕事を見出すという意味でも、年間契約で年に3回、4回刈りますよ、その代り年間5万円維持費をくださいという形でやっていくと理解が得やすいのかなという感じがしますので、それも是非取り組んで、やっぱり私たちも近隣に荒れている田んぼがあるので、持ち主もわかっているんですけども、なかなか普段顔を合せているので言い出しにくいという面がありまして、それがやはり、年何回でも契約しているよってなれば、こちらも安心して誰かが、そういう契約している人が刈ってくれる、それがまた新しい仕事になるというふうな形になれば、一番いいのかなと思っております。そういうのも是非検討してください。

○産業建設課長（糸川成人君） 今回の提案につきましては、実際、草刈りを町でやるということではなくてですね、基本的には個人の財産ですので、やって下さいというような通知の内容になりますけれど、できない場合はシルバー人材センターの方に依頼してくださいということで案内をしているところでございますので、その辺につきましてはシルバー人材センターの方と相談できればなということで考えています。

○2番（鈴木茂孝君） 以前から鳥獣害っていう問題は大きな問題になっておりまして、賀茂農林事務所であったり農協であったり、もちろん町も対策をとっているんですけども、なかなか成果が出ていないというのが私たちの実感でございます。今後も何か、もっともっと調べていって、特効薬的なものができればいいかなと思うんですけど、そういうものはなかなか難しい、地道にやっていかなければならないというところですが、また、ご努力をお願いいたします。

もう少しですのでまとめます。今回、道の駅の整備計画に関しまして、ワーキンググループとしっかり話し合っ、やはり、ここは譲るよとか、ここはやるよっていうのをもうちょっと突っ込んで、私たちとしては拒絶されている感じがします。もう少しじっくり話し合っ、やってほしいなというのが率直な感想です。それから鳥獣害被害に関しては、猟友会の方々への報酬の検討、そして耕作放棄地を管理する仕組みを構築していただきたいということです。以上で私の一般質問を終わります。

○議長（藤井 要君） 以上で鈴木茂孝君の一般質問を終わります。

---